

中村文子

清見がた清き濱邊にさまよひて

あかず眺むる富士の神山

折にふれて

東くめ子

家にまつ妻に見よとて束ねこし

心も色もふかきすみれよ

紅染のうぶきぬはんと手にとれば

まだみぬ稚兒のおもかけにたつ

ピアノ弾く君か手の上にこぼれくる

瓶の櫻はこゝろあるらし

山吹のまばゆき色にあくがれて

道ならぬ道に迷ふ世の人

波と見ん雲さへたゝぬ空の海に

むらがりのほるのほり鯉かな

自轉車三首

ひびかし

さくら咲く木の下蔭を君とわれ

自轉車驅りていそぎゆくかな

風を切りて乗り行く我を賤の子らが

早いなあと許りあきれ見る哉

いそぎ行く櫻ばやしに風起り

鬢髪そよぎて落花顔をうつ

月のかけ

つねを

やへも一と重も

みどりいろく

さくらはやしの

旅ねさびしき

いづこに行くか

夕のはなづく夜

名のるはつ音の

軒ばいふせき

ふり來しさとの

なみだは見えぬ

なつかしく

人知らぬ